

山梨県立文学館 館報

1989(平成元年)年
11月 創刊

第88号



大きな親「ころ」
特設展 資料紹介
「歿後五十年 飯田蛇笏展」
閲覧室より・寄贈資料より
「文学館至宝展」展示資料より・
館からのご案内

廣瀬町子

5 4 3 2

資料紹介 芥川龍之介 久米正雄宛葉書、
芥川龍之介・久米正雄 野口真造宛葉
書、「近代日本文藝読本」縁起・序・
凡例原稿ほか 6・7
館の日誌 利用のご案内 8

特設展

歿後五十年 飯田蛇笏展

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

平成二十四年九月二十九日(土)～十一月二十五日(日)

近代俳句を代表する俳人飯田蛇笏(だこ)（一八八五～一九六二 本名飯田武治） 笛吹市境川町生まれ）が亡くなり五十年目を迎える本年、改めてその足跡をふり返り、今日もなお多くの人々に読み継がれている作品の魅力に光をあてていく。

蛇笏は、山梨県立尋常中学校中退後十九歳で上京、京北中学校を経て早稲田大学に入学した。当初、新体詩や小説を「文庫」「新声」に盛んに投稿したが、やがて本格的に俳句に打ち込むようにな



一九五三(昭和二十八)年、自宅で

藤川二郎撮影

る。高浜虚子が主宰する雑誌「ホトトギス」の句会に参加して頭角を現すが、小説へ専念するという虚子の宣言と機を一にして、大学を退学し帰郷、生活の基盤を郷里境川村に定めた。大正期に入つて虚子が俳壇へ復帰すると、再び「ホトトギス」で虚子の選を仰ぎ、「芋の露連山影を正うす」をはじめとする初期の代表作を次々と発表し、注目を集めた。

一九一五(大正四)年には、愛知県で創刊された俳句雑誌「キラ」の投稿欄の選者に迎えられ、数年を経て蛇笏は「キラ」の主宰者となり、誌名を「雲母」と改題、「雲母」は蛇笏の活動の舞台の中心となった。さらに一九三二(昭和七)年に第一句集『山廬集』を刊行、俳壇に確固とした地位を築くとともに、随筆や評論にも活躍した。蛇笏の元には多くの門弟が集まる一方、若山牧水、芥川龍之介、詩人の三好達治、画家の岸田劉生など、多彩な人々との交流が生まれている。

昭和十年代後半から二十年代前半には、次男の病死、戦地に赴いた長男・三男の死、戦争による「雲母」の休刊と、苦難の時期が続いたが、一九四六(昭和二十一年)年に「雲母」を復刊した。六十代を迎えた蛇笏の作品は、悲傷を越えて充実期を迎え、最晩年に至るまで衰えることのない創作意欲を示した。蛇笏の俳句は、「峻厳」「高雅」などと評され、屹立する高峰に喩えられる。「くろがねの」「芋の露」のほか「をりとりてはらりとおもきすすきかな」「冬瀧のきげは相つぐこだまかな」などの代表作は、近代俳句史に残る名句として今日まで愛誦され続けている。

本展では、当館の収集してきた蛇笏の直筆の原稿、書画、書簡、関係著作、写真など約百二十点を展示する。

主催 山梨県立文学館
共催 山梨日日新聞社
NHK甲府放送局

後援 笛吹市・笛吹市教育委員会・角川学芸出版・角川文化振興財団・NHK学園・山梨放送・テレビ山梨・テレビ朝日甲府支局・朝日新聞甲府総局・毎日新聞甲府支局・読売新聞甲府支局・産経新聞

関連企画

※当館まで電話かFAXでお申し込みください。いずれも参加無料。講座についてはすでに年間文学講座3にお申し込みの方は新たな申し込みは不要です。

講演会

宇多喜代子(俳人)

「裏口に展がる世界」

九月三十日(日)午後一時三十分～三時 定員五〇〇名 講堂

鼎談

浅井一志(俳人)

和田知子(俳人)

廣瀬町子(俳人)

「飯田蛇笏を語る」

十月七日(日)午後一時三十分～三時 定員一五〇名 研修室

文学講座(年間文学講座3)

高室有子(当館学芸員)

「山廬を訪れた人々——飯田蛇笏をめぐる文人たち——」

十一月一日(木)午後二時～三時十分 定員一五〇名 研修室

大々々親いっくろ

廣瀬町子

昭和二十八年、地元の山梨中央銀行に
入行して間もなく、職場の上司から、山
へ登りたいなら俳句も作るように、とす
すめられてまだあいまいな気持ちでいた
ときに、たまたま銀行合同句会が主催し
た文化講演会でお聞きしたのが飯田蛇
笏先生の講演であった。

壇上に立たれた先生の凛とした姿勢、
時々きらりと光る眼、すこし高めの声、
俳句に向かわれる真摯な情熱に、只引き
込まれてゆくばかりだった。それは理屈
ではなく身の内を何かが走り抜けてい
くような衝撃の出会いであった。

祖父たちのやっていた発句というイ
メージを一変させたのも、銀行のストラ
イキという過激な事態を経験した後の
むなしさを埋めてくれたのも、この出会
いがあったからこそといま、しみじみと
思い出す。

この頃、蛇笏先生が主宰する「雲母」

はその編集を飯田龍太、石原八束という
若い世代が担当するようになり「雲母」
はまさに戦後の充実の時を迎えていた。
甲府在住の二十代を中心に誕生した「こ
だま俳句鑑賞会」は折から発表された

炎天を槍のごとくに涼気すぐ

蛇笏

春の鳶寄りわかれては高みつつ

龍太

など、その思い切った表現に興奮し、抒
情ゆたかな格調高いリズムを口ずさん
では、お互いの思いをぶつけ合っている
仲間の中で、私も又いつか俳句にのめり
込み、その魅力に取りつかれていった。
蛇笏先生命名の女性だけの句会「若菜
会」が生まれたのもこの頃で、指導に來
て下さった先生の、スーツに中折れ帽を
被りステッキを持つダンディな姿がな
つかしい。

ことに身に沁みている思い出に触れ

たい。

昭和三十三年、廣瀬直人との結婚の報
告に山盧へ伺った折のこと。主人は龍太
先生と編集の打合せがあり、私は蛇笏先
生ご夫妻としばらくお話をさせていた
だいた。父を亡くしたばかりの弟が、ご
長男鵬生氏の過ごされた大学に入学し
たこともあって弟の様子を気遣って下
さった。先生はことば少なな傾き、菊乃
夫人は私の両の手を取って握りしめな
がら「うち、つきりだからね。何でも相談
しなさいよ。頑張りなさいね」と励まし
て下さったあのふつくらと柔い手の感
触も忘れ難い。

最後に蛇笏先生にお目にかかったの
は、長男を連れてお見舞いに伺った時で、
すでに病床に臥しておられたが、この時
は小康を得られて床に起きて私達を迎
えて下さった。龍太先生のご子息二人は
少しお兄さん格、長男は弟分ということ
で大層歓迎して下さり、たちまち蛇笏先
生の周りを飛び廻るのではらはらして
いたが、先生は「いいよ、いいよ、子ど
もは元気なのが一番いい」とおっしゃっ
て柔和な笑顔で子供達をじつと見てお
られたが、目尻に涙を溜め何か遠くをみ
ておられるふうで、いま思うとご自身の

亡くされたお子様のひとりひとりを思
い浮べていたのではなかったかと胸が
詰まる。「しばらくは育児に専念しなさい、
だけど俳句を忘れてはいけないよ」
とおっしゃった温い声も耳元にある。

私にとって真実父のような存在で
あったが、考えてみると先生は、大きな
親心で誰彼の区別なく、しぜんな姿です
べてを包んで下さっていたのだと、その
存在の大きさにあらためて思い至る。

先生の最後の句集「椿花集」には

地に近く咲きて椿の花おちず

秋たつときけばきかるる山の音

いち早く日暮るる蟬の鳴きにけり

竹落葉午後の日幽らみそめにけり

ゆく水に紅葉をいそぐ山祠

など、あまたの悲喜を内奥に沈め、一筋
に貫かれた強い精神力で格調高く詠い
上げた粒選りの作品が並ぶ。今の私に
とって何よりも心安らぐ清澄の詩情。自
然も人事も混沌の現代だからこそ求め
られる本来の俳句の姿ではないだろう
か。

山中の螢を呼びて知己となす

蛇笏

その片隅に加えていただけたらと希
いつつ。
(俳人)

■特設展 資料紹介

歿後五十年 飯田蛇笏展

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

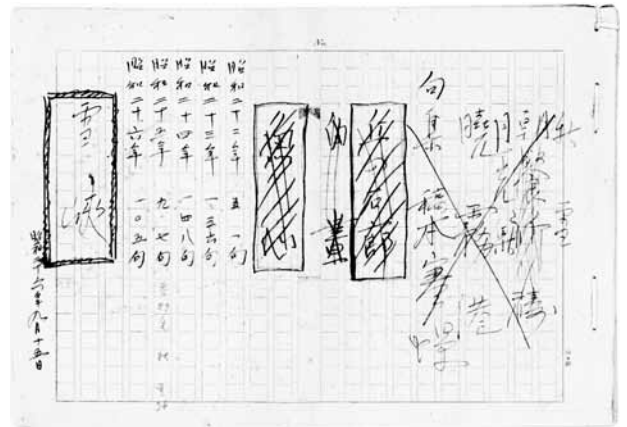
◇飯田蛇笏『雪峡』草稿

蛇笏の第七句集『雪峡』の草稿。『雪峡』は一九五一(昭和二十六)年十二月、創元社刊行。一九四七年春から一九五一年冬までの五百三十九句を収録。

前半には、戦争による逆縁に見舞われた悲痛な思いをこめた作品が並ぶ。一九四七年秋、長男聡一郎(俳号 鵬生)の戦死公報(一九四四年十二月、レイテ島で戦死)に接した際の作、

戦死報秋の日くれてきたりけりを始めとする「鵬生抄」と題した十四句や、翌一九四八年二月、三男麗三の外蒙古での戦病死の公報を受けての作、春雪に子の死あひつぐ朝の燭などである。

一方、戦後、東京・大阪など各地で開かれた句会出席のための精力的な旅行吟も多い。一九五〇年の春と夏の部には、約一ヶ月に及ぶ北海道旅行での二十一句「北方驛旅の諷詠」を春と夏に分けて収録。一九四五年の五月から休刊していた主宰誌「雲母」は、終戦の翌年三月に東京で復刊したが、一九五〇年四月によろやく、発行所を元の飯田家に戻した。跡取りとなった四男龍太が雑誌の編集



を引き継ぎ、「雲母」が新たな歩みを固めた頃の北海道旅行であった。句集『雪峡』には、戦後の悲傷とともに、それを乗り越えていこうとする蛇笏の力強い足跡を見出すことが出来る。

草稿は二十字×二十行の原稿用紙(A4判)。青インクによる本文に、赤インク・朱墨による補筆がある。表紙のほか四十六枚の草稿を右側に二カ所こより綴じし、後ろに目次三枚、後記二枚の草稿を加えて再度、右肩一穴をこよりで一冊にまとめている。

本文には、句の配列の移動を指示する矢印や、削除や追加の跡が多く、完成稿までにはさらに、推敲されたと思われる漢字・ひらがな表記にも、句集と比べる

と異なるが多い。

注目されるのは、表紙(写真)で、「秋雪」「朝食祈祷」「月光集」「暁霧港」「句集 稿本寒蟬」「丘の石廊」「白昼」「魚心」と、句集名の候補と思われる語が並び、すべて削除の跡がある。収録対象の年と句数を記した後、左隅に「雪峡」と大きく書き四角で囲っている。左下には「昭和二十六年九月十五日」の日付がある。句集名決定までの変遷を思わせる。

本句集の後記に蛇笏は『雪峡』の題名について次のように述べている。

「四時白雲が去来するわが生活環境は、文字通りの山峡なのであるが、この山峡が白皚々たる雪にうずもれたときは、いまのわたくしのころに一段とびつたりするものがあるところから、然う名づけたのである。」

◇飯田蛇笏「たましひの静かにうつる

菊見哉」額装

この句の初出は、「ホトトギス」一九一五(大正四)年十二月号、高浜虚子選雑詠欄。初出形は「たましひのしづかにうつる菊見かな」。第一句集『山廬集』では「たましひ」と改められた表記で収録されている。

この頃の「ホトトギス」雑詠欄は、蛇笏のほか村上鬼城・原石鼎・渡辺水巴・前田普羅らが巻頭作家として活躍して

いた。この句の掲載時の雑詠欄の巻頭は、村上鬼城「秋風やよごれて歩行く盲犬」など二十句。次席が原石鼎「芭蕉高し雁列に日のありどころ」ほか二十句で、蛇笏は続く第三席。十七句中の末尾に「たましひのしづかにうつる菊見かな」が採録された。蛇笏はこの句について「自選自註五十句抄」(現代俳句)一九五一年一月号掲載)でこう述べている。

「k市に偶々菊の会があり、それを見した。鑑賞者が寥々たるもので菊は素晴しかった。脚の反射運動と絶縁した鑑賞のたましひのみが静かに移動していった。この「かな」は金輪際尊重しておぼえである。」

なお、この書額は、井伏鱒二旧蔵のもので、今回初公開となる。

(学芸課 高室有子)



閲覧室より

同じ日の方はいますか？

閲覧室には、時々、小さなコーナーが現れます。

そのコーナーは可動式の長机を二つ並べて作ります。場所は、受付カウンターのすぐそばです。このコーナーは、閲覧室の入口に立つと、真っ先に目に入ります。ご覧になったことはありませんか。

こちらでは「文学者の誕生日にちなんだ資料紹介」を行っています。取り上げられているのは、山梨県出身、またはゆかりの文学者たちです。文学者自身や作品をより身近に感じていただけるように、誕生日にあわせて、その後三週間程の間だけコーナーを設けます。

「文学者の誕生日にちなんだ資料紹介」では、生涯をつづった本や作品集など、関連する図書や雑誌を二十五点ほど紹介しています。実際に手にとってご覧になることができます。

今年度はまず、四月末から五月にかけて、作家の木々高太郎を取り上げました。木々高太郎は、一八九七(明治三十)年五月六日、現在の甲府市に生まれました。一九三七(昭和十二)年には、『人生

の阿呆』で第四回直木賞を受賞しました。山梨県出身者で初の受賞です。探偵小説家としてはもちろん、本名の林蔵で大脳生理学者としても活躍しました。紹介資料には、直木賞受賞作『人生の阿呆』などの探偵小説、編集者として加わった探偵小説雑誌「シュピオ」の直木賞記念号や、林蔵の著作でベストセラーとなった『頭のよくなる本』などがありました。

六月は作家・太宰治です。

太宰治は一九〇九(明治四十二)年六月十九日、青森県で生まれました。六月

十九日は、太宰治の忌日「桜桃忌」にもなっています。山梨とはゆかりが深く、一九三八(昭和十三)年には御坂峠の天下茶屋に滞在し、のちに、甲府の石原美知子と結婚、新婚時代や疎開期を甲府で過ごしました。コーナーには、「富嶽百景」や「新樹の言葉」「美少女」など、山梨が登場する作品を収録した初版本(復刻版)を並べました。また、近年続いて映画化された「ヴィヨンの妻」なども紹介しました。

七月は、俳人・飯田龍太を取り上げました。

飯田龍太は戦後を代表する俳人の一人です。一九二〇(大正九)年七月十日、現在の笛吹市境川町に生まれました。父で俳人の飯田蛇笏が主宰した俳句雑誌

「雲母」を引き継ぎ、九百号まで発行を続けました。最初の句集『百戸の谿』、読売文学賞を受賞した句集『忘音』の限定特装本、「雲母」の終刊号などを紹介しました。

そして、九月十二日から、作家・辻邦生の資料紹介が始まります。

辻邦生は一九二五(大正十四)年九月二十四日に東京で生まれました。父が旧・春日居町の出身で、辻邦生の本籍地は山梨県です。期間中は、父の死を契機に山梨でのルーツをたどった「銀杏散りやまづ」などの作品をご覧いただけます。

今年度はこれから、歌人・山崎方代(十一月一日生まれ)、作家・檀一雄(二月三日生まれ)、作家・芥川龍之介(三月一日生まれ)を順にご紹介していきます。コーナーにどんな資料が並ぶか、楽しみになさってください。

ところで、今回ご紹介した文学者たちと、誕生日が同じだった方はいらっしゃいますか。誕生日を知って、文学者に対して、これまでと違った印象を受けられたりしましたか。もし、これをきっかけに、文学者に親近感や興味を抱き、さらに、文学館の閲覧室や展示室で理解を深めていただけたら、うれしく思います。

(資料情報課 小林幸代)

「寄贈資料より」(平成二十四年五月〜七月)

- 牛田守彦氏より「太宰治の疎開および空襲体験」抜き刷り一点。
- 花里鬼童氏より秋田雨雀書簡一点、図書二点、雑誌一点。
- 青木文字氏より「中村星湖先生文学碑拓本」など特殊資料四点、図書九点、雑誌一〇五点。
- 古田修吾氏より長谷川朝風「新涼の鈴をたまる猫の胸」短冊ほか一四点、図書一点、雑誌一点。
- 矢野潤水氏より石原舟月「おもひしつむことくなかるゝ冬の水」短冊ほか二点。
- 八巻定子氏より遠山壺中「梅早き端山より水ひかりけり」短冊ほか一九点。
- 備中臣道氏氏より「山田多賀市雑誌目次」印刷物、雑誌各一点。
- 杉山豊氏より山本周五郎「季節のない街」新聞切り抜き一点。

次の皆様からも図書・雑誌を御寄贈いただきました。(敬称略)

秋山 佐和子	坂本 富江
穴水 公一	佐野 秀延
飯野 正仁	庄野 一由
石原 武弘	白倉 安義
一瀬 公弘	関口 安義
伊藤 桂一	滝山 正治
植松 光宏	中田 水光
宇多 喜代子	中村 吾郎
大野 とくよ	中山 孝平
岡田 日郎	秦 恒平
小笠 裕二	平松 伴子
勝又 浩	水口 忠子
橘田 活子	光本 恵子
小島 健	望月 美子
小林 是綱	依田 武勝
三枝 昂之	

この他に団体の方々からも御寄贈いただいております。

富士の国やまなし国文祭開催記念

「文学館至宝展 よみがえる

文豪の素顔」展示資料より

会期 平成二十五年一月十四日(月)～

三月十七日(日)

富士の国やまなし国文祭の開催を記念し、当館で収蔵する資料より、選りすぐりの名品を展示。

本年三月、黒澤明監督作品でスクリーンを務めた野上昭代氏より寄贈していただいた井伏鱒二関係資料のうち、書簡・写真などを初公開する。

野上氏は、敗戦後間もない一九四七(昭和二十二年)年に八雲書店の編集者として井伏鱒二と出会う。その後、十七年ほど経て再会をはたし、井伏の晩年まで交友を持ち続けた。長野県富士見町高森の井伏の別荘や、山梨への旅行にも同行している。

一九八五(昭和六十)年九月十二日消印の高森の別荘から出された井伏の書簡には、「近所の岡部さんのところでキツネを飼ひはじめました。十五日までに見に行くつもりです。(略)狐は鶏やブドウが大好きださうです。イソツブ物語に青いブドウを見て狐が棄てゼリフを云ったとありますが、イソツブは狐の習性をよく知ってゐたのでせう。」と、地元の人との交流や、狐のエピソードをユーモラスに語っている。

一九八七(昭和六十二)年三月一日消印の書簡には、「花見のときには元気よ

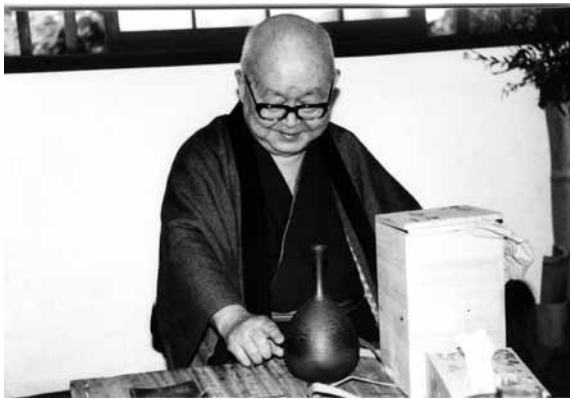
く出かけたいたいものです。やはり甲州がいいでせう。(略)甲州の桜は見たいものです。あれだけまとまつた花は珍しいです。」と伝えている。

これらの野上氏に宛てた井伏の書簡からは、二人の温かな交流が伝わってくる。

展示は、常設展観覧料でご覧いただけます。(学芸課 中野和子)

【主な展示資料】

- 下村為山 「樋口一葉像
- 津田青楓 「漱石山房図」 軸装
- 芥川龍之介 「或阿呆の一生」 前書き原稿
- 中里介山 「大菩薩峠 無明の巻」 原稿
- 太宰治 「斜陽」 草稿
- 深沢七郎 「檀山節考」 草稿
- 安田鞞彦 谷崎潤一郎像 など



長野県富士見町高森の別荘にて

館からのご案内

■展示

○常設展示室 期間限定公開資料

伊藤左千夫他アララギ派歌人短冊貼り交せ屏風

9月11日(火)～10月24日(水)

鑄木清方「大黒屋の美登利」軸装

10月25日(木)～12月2日(日)

森鷗外「灰燼」原稿

12月4日(火)～1月30日(水)

室生犀星「かげろふの日記遺文」原稿

1月31日(木)～3月17日(日)

○常設展示室第5室の展示替え

10月6日(土)～3月17日(日)

「詩」短歌「俳句」「川柳」「漢詩」のジャンルを紹介いたします。

■教育普及事業

※いずれも無料でご参加いただけます。映画会以外は電話かFAXでお申し込み・お問い合わせください。

○ひとりオペラ 「樋口一葉 恋の和歌」

11月23日(金)午後1時30分開演

台本・作曲 仙道作三

○年間文学講座

・講座1 「源氏物語を読む」

講師 池田尚隆(山梨大学人間科学部教授)

9月13日(木)、10月18日(木)、

11月15日(木)、12月20日(木)

・講座2 「夏目漱石再読」〈近代的自我と人間関係論の視点から〉

講師 小菅健一(山梨英和大学教授)

9月8日(土)、10月13日(土)

11月17日(土)、12月22日(土)

・講座3 「山梨の文学」

講師 当館職員

9月20日(木)「深沢七郎の語り」

11月1日(木)「山廬を訪れた人々―飯田蛇笏をめぐる文人たち―」

12月6日(木)「芥川龍之介書簡の魅力―館蔵資料を中心に―」

○名作映画鑑賞会

9月16日(日)「愛染かつら」

10月21日(日)「聖職の碑」

11月11日(日)「雪国」

○読書会

9月15日(土) 朝田武士

10月9日(日) 井伏鱒二

11月18日(日) 藤原正彦

12月23日(日) 宮部みゆき

1月19日(土) 林真理子

2月16日(土) 山本周五郎

3月17日(日) 芥川賞受賞作

■閲覧室(入場無料)

○閲覧室資料紹介

「飯田蛇笏―歿後50年―」

9月29日(土)～11月25日(日)

「やまなし文学散歩」

1月14日(月)～4月14日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

「辻邦生」(9月24日生まれ)

9月12日(水)～10月3日(水)

「山崎方代」(11月1日生まれ)

10月24日(水)～11月14日(水)

「檀一雄」(2月3日生まれ)

1月23日(水)～2月13日(水)

「芥川龍之介」(3月1日生まれ)

2月20日(水)～3月13日(水)

資料紹介

今年度新たに収蔵した芥川龍之介資料の内、葉書三点を翻刻し、原稿等は概要を記す。ここで紹介する資料は、二〇一三(平成二十五)年一月十四日から開催する「文学館至宝展」に展示する予定。

芥川龍之介 久米正雄宛葉書

一九一六(大正五)年一月五日消印

今君の戯曲をよんだ 始の stage direction が莫迦に impressive なのでおそろしくいゝものを書いたんぢやあないかと思つておそろしかつた それからよんでゆくと金井博士が出る迄の間が masterly なののでいよくおそろしかつた そのさきへゆくと不満な点が少しづつ出て来たのでさうおそろしくはなくなつたがそれでもよんでしまつてからおれの技巧はまだこれ程にはいかないと思つた 不満な点と云ふのはスピードの早いなどがその一つだ もう少し内容に立ち入つて云へば美代子が序幕で出てしまふなどがその一つだ(美代子をうちへおいて父子夫婦のおそろしい struggle を発展させた方が effect がよかくなりはいしないか) 人間は藤井と巴子とが一番よく書いてゐる おれの見る所によると君がかいて成功する女性は常に巴子の type のやうな気がする いつかいてもおそろしく lebendig に生きてゐる dramaturgie の上では巴子が先妻の衣装をきてはいつて来る所は今までの君の書いたものの中で一番大胆な行き方だと思ふ 喜劇と悲劇とを一つ坩鍋でとかすやうな行き方だと思ふ これが失敗に了つたからと云つて残念がる必要はない これが成功すれば君はもう天才である 大急ぎで之を出す

〈受〉本郷区森川町一宮裏河野様方

久米正雄様

〈発〉Riennoceque.

〈翻刻者註〉「王印 5. 1. 5」の消印。一錢五厘の官製葉書に黒インク使用。

芥川と久米正雄(一八九一〜一九五二)は、一九一〇(明治四十三年)年に第一高等学校一部乙類に入学。以来、生涯をつうじて親交を結んだ。

一九一六年当時、二人は、東京帝国大学文学科大文学英吉利文学科三年生。芥川は前年の十一月、「帝国文学」第二十一巻第十一に「羅生門」を発表。

久米は、一九一四年三月、第三次「新思潮」第一巻第二号に発表した「牛乳屋の兄弟(三幕物)」が同年九月に有楽座で上演され、劇作家として注目されていた。

芥川が評した久米の戯曲は、「帝国文学」第二十二巻第一(一九一六年一月)掲載の「金井博士と其子(三幕家庭劇)」のこと。

芥川龍之介 久米正雄宛葉書

一九一六(大正五)年五月一日消印

トルストイの沙翁論をよんだ ほんとだと思ふ点をかくと

(1) 多くの場合(少くともリアの場合)沙翁の作が原作ほど自然でないと思ふ事

(2) 沙翁の思想が庸俗な事 従つて沙翁の流行を俗衆の思想と沙翁の思想との一対で解釈するのが適当な事

(3) 性格描写に欠陥のある事(これは(1)とある点で重複するが)

トルストイの沙翁論にはその代り偏見もある遍見でない迄もトルストイ自身の趣味なり思想なりが論理を強く色づけすぎた所がある

(1) トルストイのレアリズムは沙翁の章句の詩的効果を無視してゐる(英国人などにはこの効果がば

かにつよく来るのだと思ふ)

(2) トルストイは沙翁が感情の錯綜した場面の表現に或妙を得てゐるのをゆるしてゐる これは沙翁を天下無類空前絶後の大芸術家にする資格でないにせよ 芸術家たる資格としては十分なものではあるまいか

(3) トルストイは沙翁の劇が要求する或約束を守らずに沙翁を見てゐるツルゲネフやフェトとトルストイの違は章句に対する直観よりもこの約束をみとめるとみとめないの差だと思ふ

〈受〉本郷区森川町一宮裏河野様方

久米正雄様

〈発〉田端 芥川龍之介

〈翻刻者註〉「王印 5. 5. 1」の消印。一錢五厘の官製葉書に黒インク使用。

芥川は、「帝国文学」第二十二巻第五号(一九一六年五月)掲載の藤東田訳「杜翁の沙翁論」を読んだと思われる。久米は、一九一六年四月に新潮社から『沙翁名作選』を刊行しており、七月の卒業に際して提出した論文は「ハムレットの戯曲術」だった。

芥川龍之介・久米正雄 野口真造宛葉書

一九一六(大正五)年(推定)八月三十日消印

おくれ龍之介道行相合傘

唯今一の宮に居ります われながら不相変盛です 龍

此処へ来て相変らず盛んな芥川の駄弁を拝聴して居ります 此画によると芥川が大変青いやうですが彼も亦真つ黒に日にやけてるんです。僕の漆黒になつてくるのハ云ふ迄ありません。

〈受〉東京市日本橋区橋町二丁目

野口真造様

〈発〉一の宮にて 芥川生



芥川龍之介・久米正雄 野口真造宛葉書
1916 (大正5) 年 (推定) 8月30日消印

〔翻刻者註〕一銭五厘の官製葉書に表書きは墨筆、裏書きは黒インク、青インク、着彩、墨筆。□□・一宮□・8・30の消印。相合傘におさまる芥川と久米が描かれ、傘には「しんしてう」(新思潮)の文字が見える。芥川の顔(向かって右)は青緑、久米の顔(向かって左)は臙脂色に彩色されている。芥川と久米は、同年二月、第一高等学校の同級生だった菊池寛、成瀬正一、松岡譲と第四次「新思潮」を創刊。七月には大学を卒業し、八月十七日から九月二日まで、現在の千葉県長生郡一宮町の一宮館に滞在した。九月一日発行の「新思潮」第一号第七号の「校正後に」には、「十七日から芥川と二人で一宮へ来てゐる。天候が険悪でない限りは毎日海へ入る。砂に転ぶ。日に焦げて真黒

になる。夜はよく寝る。序でによく仕事が出来ると云ひたいが、それだけは除外例だ。(久米)」とある。二人は一宮から、夏目漱石をはじめ、友人、知人らに近況を知らせる書簡を送っている。

野口真造(一八九二〜一九七五)は日本橋橘町の呉服商「大彦」の創業者野口彦兵衛の次男で、芥川と江東尋常小学校の同級生。芥川の随筆「学校友だち」(中央公論一九二五年二月)に「小学時代に僕と冒険小説を作る。僕よりもうまかりしかも知れず」と紹介されている。真造の兄・野口功造は、芥川の『影燈籠』(一九二〇年一月 春陽堂)の装幀を手がけた。妹・野口綾子は、後に芥川夫妻が立会人となり、芥川の友人・岡栄一郎と結婚したが、翌年に離婚している。

『近代日本文藝読本』縁起・序・凡例原稿ほか

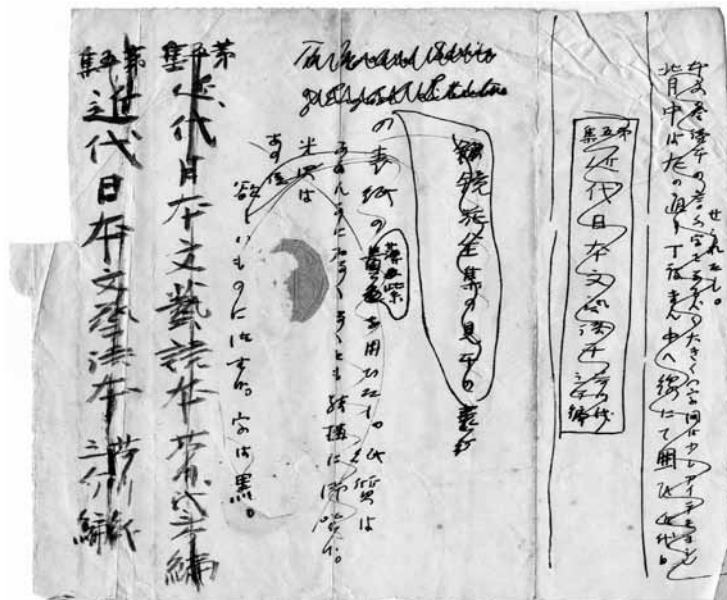
〔註〕芥川編集の『近代日本文藝読本』全五集(一九二五年十一月 興文社)に関連する資料を受け入れた。内容は次のとおり。

- 一、『近代日本文藝読本』縁起・序・凡例原稿
- 二、『近代日本文藝読本』装幀に関するメモ(写真)
- 三、芥川龍之介 興文社石川寅吉宛封筒
一九二五(大正十四)年五月二十四日付
- 四、広告文章稿

一は松屋製青野二百字詰め原稿用紙十三枚に黒インクで書かれている。所々に使われている赤インクと鉛筆は芥川以外の手によるものと思われる。原稿と活字の間に異同はほとんどない。縁起・序・凡例は各集共通で巻頭に掲載された。二も芥川が書いたものと思われ、「本文藝読本の言ふ字をなるべく大きく(字間は少しアイテモヨシ)せられたし。背中左の通り丁度まん中へ線にて囲ひ」「鏡花全集の見本の表紙の薄紫を用ひたし。紙質はあんな

に厚くなくとも結構に御坐候。光沢はあの位欲しいものに御坐候。字は黒。」など、文字や表紙への注文が記されている。三は、墨筆で書かれ、表書が「日本橋区馬喰町二ノ一 興文社内 石川虎様」、裏書が「市内田端四三五 芥川龍之介 五月二十四日」とある。消印は「日暮里・渡辺町14. 5. 24」。速達印が押され、三銭切手三枚貼付。四は、芥川の筆とは思われず、「小学児童の読物が現代の代表的作家の芸術的良心と道徳的信念とで、編輯されたのは、本書が初めてあります」の一文で始まる。菊池寛と芥川共編の『小学生全集』全八十八卷(一九二七〜一九二九年 興文社・文藝春秋社)の広告文として書かれたものと思われる。

(学芸課 保坂雅子)



館 の 日 誌

- 6・14 (木) 年間文学講座Ⅲ「飯田龍太―俳句と季節―」
講師 井上康明 (当館職員)
- 6・21 (木) 年間文学講座Ⅰ「源氏物語の恋」
講師 池田尚隆 (山梨大学教授)
- 6・23 (土) 第 2 回読書会
- 6・24 (日) 名作映画鑑賞会「泥の河」
- 7・1 (日) 文学創作教室・講演会「私の小さな本棚」
講師 佐伯一麦 (作家)
- 7・4 (水) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「飯田龍太」(～7・25)
- 7・6 (金) 山梨文学散歩事業説明会
- 7・7 (土) 年間文学講座Ⅱ「『それから』―高等遊民の理想と現実の相克―」
講師 小菅健一 (山梨英和大学教授)
- 7・10 (火) 学芸員実習開始 (～7・15)
- 7・12 (木) 年間文学講座Ⅲ「富士北麓と文学」
講師 小石川正文 (当館職員)
- 7・14 (土) 県立文化施設夏休み促進イベント (於 イオン甲府昭和店)
- 7・16 (月) 夏休み自由研究プロジェクト合同プレゼン (於 アイメッセ)
- 7・19 (木) 年間文学講座Ⅰ「光源氏物語の始発」
- 7・21 (土) 特設展「フランダースの犬～愛と友情の物語～」開始 (～8・26)
第 3 回読書会
- 7・22 (日) 名作映画鑑賞会・アニメ「宗谷物語―南極への挑戦―」
呈茶 (素心菴)
- 8・1 (水) インターンシップ・職場体験 (～8・3)
- 8・3 (金) 子どもワークショップ「消しゴムはんこで犬のポストカードをつくろう」講師 高橋裕子 (青少年PFCアドバイザー)
- 8・4 (土) 夏の常設展 期間限定公開資料・後期 芥川龍之介「河童」草稿 (～9・9)
- 8・8 (水) 子どもワークショップ「体験！歌舞伎ワークショップ」講師 市川喜昇 (歌舞伎俳優)
インターンシップ・職場体験 (～8・10)
- 8・11 (土) 年間文学講座Ⅱ「『門』―生きている過去と死んだ現在―」
- 8・17 (金) 子どもワークショップ「体験！狂言講座」
講師 高野和憲 (狂言師)
職場体験
- 8・19 (日) 名作映画鑑賞会・児童劇映画「少年の日の思い出」
- 8・23 (木) 年間文学講座Ⅰ「光源氏の元服・結婚」
- 8・26 (日) 第 4 回読書会
- 9・8 (土) 年間文学講座Ⅱ「『彼岸過迄』―人間・男女関係の〈悲喜劇〉―」

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00～17:00 (入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00～19:00
(土・日・祝日は18:00まで)
- 講 堂・研修室 9:00～21:00
- 茶 室 9:00～21:00
(準備・片付けの時間も含みます)

■休館日 (9月～3月)

- 9月3・10・18・24日/10月1・9・15・22日
11月19・26日/12月3・10～17・28～31日
1月1・7・15・21・28日/2月4・12・18・25日
3月4・11・18・25日
- 12月10日(月)～17日(月)は、くん蒸のため休館します。また、年末年始は12月28日(金)～1月1日(火)まで休館します。
- 常設展示室第5室休室
9月10日(月)～10月5日(金)、11月27日(火)

■展示室観覧料

	常 設 展		
	個 人	団 体 (20人以上)	美術館との 共 通 券
一 般	310円	250円	650円
高 校・大 学 生	210円	160円	320円
小・中 学 生	100円	80円	160円

※65歳以上の方 (企画展は県内在住者のみ)、障害者及び介護者、並びに土曜日の小・中・高・特別支援学校生の観覧料は無料です。

※県内の宿泊施設へ宿泊または宿泊予約された方で、宿泊当日または翌日に観覧される場合、個人でも団体料金でご観覧いただけます。宿泊 (予定) を証明するもの (領収書・予約クーポン等) を受付へ提示してください。

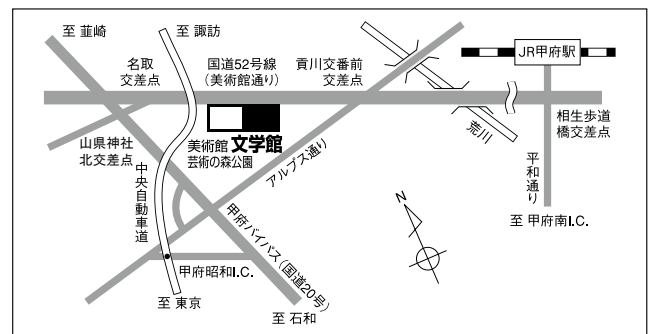
■アクセス

中央自動車道甲府昭和 I C から

料金所を昇仙峡・湯村方面へ出て、200m先左折、徳行立体南交差点左折、アルプス通りを約2km直進、貢川交番前交差点左折、国道52号を韮崎方面約1km左側。

JR中央本線甲府駅から

南口、6番バス乗り場から「貢川団地」、「芦安」、「社会福祉村」、「大草經由韮崎駅」、「竜王駅經由敷島営業所」、「県立美術館經由中村循環」行のいずれかで「県立文学館東」または「山梨県立美術館」下車。



山梨県立文学館 館報 第 88 号

平成 24 年 9 月 10 日発行

編集兼 近 藤 信 行
発行人

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>